**絵や立体，工作に表す活動（上学年）部会　提案発表**

吉野川市立知恵島小学校　大　塚　芽　依

**１　はじめに**

　　本学級の児童は，意欲的に図画工作に取り組んでいる。友達の作品のいいところを見つけるのが得意で，活動しながらも自然と友達の作品に目を向け，温かい言葉をかける姿が見られる。図画工作科が好きかというアンケートでは，全員が「大好き」もしくは「好き」と答えた。しかし，児童の様子を見ていると，表したいことを思いつくのが苦手だったり，これでいいのだろうかと慎重になったりする児童もいる。そこで，児童が自分で選択したり，活動を決めていったりする過程を大切にし，資質・能力を十分に発揮でき，表現する喜びが感じられるような授業を目指し，実践することにした。

**２　指導の実際**

1. 題材１『ここにいたのね！ようせいさん』

〈 立体　A表現（１）イ（２）イ　B鑑賞（１）ア　共通事項（１）ア（１）イ 〉

　　　①　目標　ア　妖精を思い浮かべて紙粘土で表すときの感覚や行為を通して，形の感じ，色の感じ，それらの組み合わせによる感じ等が分かり，絵の具や接着剤などについての経験を生かし，表し方を工夫して表す。

　　　　　　　　イ　いるといいなと思う妖精を想像したことから，表したいことを見付け，形や色，材料等を生かしながら，どのように表すのかを考えたり，作品のよさや面白さを感じ取ったりする。

　　　　　　　　ウ　いるといいなと思う妖精を思い浮かべて紙粘土で表す活動に進んで取り組み，つくりだす喜びを味わうとともに，形や色等にかかわり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

　　　②　実践計画

　　　　　第１次　妖精がいると思う場所を探し，どんな妖精がいると楽しいか想像する。････１時間

　　　　　第２次　紙粘土をつかって，自分が想像する妖精を工夫してつくる。･･････････････３時間

　　　　　第３次　校内に展示し，自分や友達の作品のよさや面白さを感じ取り，伝え合う。･･･１時間

（２）題材２『ほっこりランプ』

　〈 工作　A表現（１）イ（２）イ　B鑑賞（１）ア　共通事項（１）ア（１）イ 〉

①　目標　ア　自分やみんながほっこりするランプシェードをつくるときの感覚や行為を通して，形や色，それらの組み合わせによる感じが分かり，表現方法に応じて和紙やお花紙等を活用し，表したいことに合わせて工夫する。

　　　　　　　　イ　和紙やお花紙等に光を通して感じたこと，見たことから表したいことを見付け，形や色，それらの組み合わせ，材料の特徴を基に，どのように表すのかを考えたり，作品のよさや面白さを感じ取ったりする。

　　　　　　　　ウ　つくりだす喜びを味わい，自分やみんながほっこりできるような形や色をランプシェードで表す表現活動に進んで取り組む。

　　　②　実践計画

　　　　　第１次　いろいろな材料に光を当てたり透かしたりして，光や影の効果を味わう。･･１時間

　　　　　第２次　自分のイメージに合わせて，材料を選択しながら工夫してつくる。････････３時間

　　　　　第３次　暗室に作品を展示し，自分や友達の作品のよさや面白さを感じ取り，表現の違いを認め合う。･･････････････････････････････････････････････････････････１時間

**３　結果と考察**

(１) 題材とのであいの工夫

題材１では，作品づくりの前に校内を実際に見て周り，どんな妖精がいたらいいと思うかを考え，想像を膨らませた。その後，妖精のプロフィールやイメージ図を書き，題材の世界に没頭できるようにした。しかし，なかなか妖精が思い付かず悩みながら活動をする児童もいた。校内を見て回る際にも，「ここにどんな妖精がいると楽しいだろうね」等具体的に考えられるような声かけを行っておけば，表したいことが見付けやすくなったのではないかと感じた。題材２では，暗室に入ることから授業がはじまった。ライトをつけると児童から歓声があがった。その後，児童は，ライトを暗室の様々な場所に設置したり，和紙やお花紙等を光に透かしてみたりして，光や影の効果を体感的に味わった。「この紙とこの紙を重ねたら綺麗」「見てみて！ここに黒い模様がでてくる」と感じたことを話し合う児童の姿が見られた。ライトの光や影の美しさを十分に味わうことで，自分の思うランプシェードを思い付くきっかけとなったようだ。題材とのであいを工夫することにより，児童のやってみたい，つくってみたいと思う気持ちを高めることができた。

（２）表し方を試すことができる環境づくりの工夫

題材１では，紙粘土を使用することで，何度でも試し，つくり直すことができるようにした。粘土を触りながら「あ！これいいかも」と思い付く児童や，「やっぱりこうしよう」とやり直す児童もいた。最終的には，イメージ図とは違う形で納得する児童もいた。題材２では，ランプの芯をつくる際，材料と材料との接着にマスキングテープを使用した。そうすることで，一度つくった後も納得するまで何度でもやり直すことができた。また，ランプシェードの製作途中で，暗室に行って光を試すことができるようにした。実際に作品に光を当てることで，光や影，その場の雰囲気が分かり，つくり・つくりかえ・つくりつづける児童の姿が見られた。「失敗してもつくり直せる」「試すことができる」という環境は，児童の思いを表現するために有効な手段であったと考える。

(３) 友達や自分のよさに目を向けることができる工夫

友達の活動を見に行きたいと思ったときに見に行くことができる環境づくりを行った。そうすることで，友達のよさを自分の作品に生かしたり，友達同士で賞賛の言葉をかけ合ったりすることができた。自分の活動に自信をもって作り続けることができる様子も見られた。全ての題材でこの環境を実践していると，「○○さんは，こんな雰囲気の色が好きだよね」と友達の好みの色や作品の雰囲気を感じ取ったり，自分とは違う友達のよさを肯定したりする言葉が増えていった。自分には自分のよさがあり，友達には友達のよさがあることに少しずつではあるが気付いていっているように思う。また，前年度からスケッチブックに学習の軌跡をポートフォリオとして残していっている。ポートフォリオは，自分のよさに気付く手段として取り入れた。

**４　おわりに**

　　振り返りでは，「はじめはどうつくろうかと迷ったけれど，だんだんいいなと思うものができてきて嬉しかったです」「光や影，雰囲気を考えながらつくると，いろいろな張り方を見つけながら楽しくつくれました」とあり，表現する喜びを感じているようであった。他の題材でも有効であるか，今後も題材研究を続けていきたい。そして，これからも，一人一人の思いを大切にし，表現する喜びを感じられるようなあたたかな授業づくりを実践していきたい。